

サイコパスな先輩に全身性感帯であることがバレました。徹底的にいじめ抜かれて快感♡
サイドストーリーver

体験版

1

金曜日の夜。駅前の繁華街は、週末の解放感に浮かれる人々でごった返していた。チエーン店の居酒屋の広めの座敷席では、西村葉が勤める会社の部署合同飲み会が開かれていた。テーブルの上には空になったジョッキや食べかけの唐揚げの皿が散乱し、アルコールの匂いと煙草の煙、そして無遠慮な笑い声が空間を支配している。

「葉ちゃん、グラス空いてるじゃん。何飲む？俺とお揃いでレモンサワーにする？」

「あ、いえ……私はもう、結構ですので……」

葉は引き攣った愛想笑いを浮かべながら、隣に陣取る男から身を引いた。男の名前は片桐。社内でも有名な遊び人で、ターゲットにした女性社員には容赦なくすり寄っていくことで知られている。今日は運悪く、葉がその標的になってしまったらしい。ノリ良く会話を返すことには慣れている葉だったが、片桐の粘着質な視線と、会話の隙を突いて太ももや肩に触れてくる手つきには、さすがに辟易していた。本音を言っただけ角を立てるのが苦手な性格が災いし、曖昧な拒絶しかできないでいる。

「そんなこと言わずにさあ。葉ちゃんって、意外とガード固いよね。でもそういう子に限って、本当はすっごくイイ声で啼いたりするんでしょ？」

「……っ、片桐さん、酔いすぎですよ」

「酔ってないって。ねえ、この後二人で抜け出さない？いいトコ知ってるんだ」

片桐の手が、葉のストッキング越しの太ももを撫で上げた。ゾワリと嫌悪感が背筋を走る。葉は弾かれたように立ち上がった。

「すみません、ちょっとお手洗いに……」

「えー、待つてるから早く戻ってきてね」

逃げるように座敷を飛び出し、トイレの個室に駆け込む。便座の蓋を下ろして座り込み、葉は深くため息をついた。

（最悪……。早く帰りたいけど、途中で抜けるなんて言い出せないし……）

鏡で自分の顔を見ると、無理をして飲んだアルコールのせいでほんのりと頬が赤く染まっていた。少し気が強いところがある葉だが、こういう場ではどうしても空気を読んてしまう。

十分ほど時間を潰し、そろそろ戻らなければ不自然に思われると覚悟を決めて個室を出た。しかし、トイレ前の細い通路の壁に寄りかかっている人影を見て、栞は思わず足を止めた。

「……遅えよ」

低い、けれどよく響く声。そこに立っていたのは、同じ部署の先輩である瀬戸誠也だった。三十一歳の瀬戸は、仕事は完璧にこなすものの、口が悪く近寄りがたいオーラを放っている。整った顔立ちには常に冷笑が浮かんでおり、年下の社員からは「何を考えているかわからない」と恐れられていた。栞もまた、普段から何かとからかわれ、彼の鋭い眼差しに射竦められることが多かった。

「瀬戸先輩……どうしてここに？」

「お前がいつまでも戻ってこねえから、便器にでも流されたのかと思って見に来てやったんだよ」

相変わらずの憎まれ口に、栞はムツとして唇を尖らせた。

「流されてません。ちよつと酔い覚ましをしてただけです」

「ふうん。で、あの発情した猿みたいな片桐の隣に戻るのか？」

瀬戸の言葉に、栞の表情が曇る。見抜かれていたのだ。

「アイツにノコノコついていくような安い女じゃねえだろ、お前は」

瀬戸は壁から背を離し、栞の腕を強引に掴んだ。

「えっ、ちょ、先輩!？」

「俺が送ってやる。荷物取ってこい」

有無を言わさぬその態度に、栞は抗うことができなかった。普段は冷たく恐ろしい先輩が、今の栞にとっては地獄からの救世主のように見えたのだ。「俺が送る」というその不器用な気遣いに、少しだけ胸が温かくなるのを感じながら、栞は瀬戸の背中を追って居酒屋を後にした。